

丹羽文雄

佛にひかれて

佛にひかれて

中公文庫

©1974

昭和四十九年十月二十五日印刷
昭和四十九年十一月十日発行

著者 丹羽文雄

発行者 高梨 茂

用紙 本州製紙
整版印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104

東京都中央区京橋二丁目一番地

振替東京三四番

定価はカバーに表示してあります

中公文庫

佛にひかれて

丹羽文雄著

目次

わが幼少時代

7

崇願寺を出て還俗に

31

父と祖母の秘事

54

終戦前後の私

78

崇願寺の歴史

104

母のありのままが私の創作に

131

解説

大河内昭爾

158

佛にひかれて

わが幼少時代

親鸞を教祖とする浄土真宗の末寺に生まれた私は、小さいころから人間の業とか罪の意識ということをたえず耳にしてきた。業とは何か、罪の意識とは何かということがよくわからないまま、その観念は私の胸の中に染まるように定着した。

本堂の仏像に向かって、私は畏怖をおぼえた。たえず見張られているようで、仏の前に立つと不安であった。畏怖の感情がいつか畏敬に変わったのは、少年期にはいつてからであった。

私には、仏像をたんに美術品として観賞することができない。幼いころにいったん根を張った観念は、そうかんたんには改まるものではない。骨董商が仏像を売りにくると、妙な気がしてならない。このひとたちは仏像を商品とする前に、おそれを感じないのだろうか。たとえそれが一枚の写真であっても、私の心にまざるものは、幼いころから心にしみついていて畏敬の思いであった。現在応接間には、どこで取りはずして来たのかわからない小さい脇仏と大同の石仏がある。仕事に疲れたり、気持ちの重いときには、それらの仏像に向かって、何時間もぼんやりと腰

をかけている。仏像に対する特殊な思いは、幼いころから、六十六年の今日まで、一本の細い流れのように心の中につづいていく。私の心はなぐさめられ、静められる。

「小さい子供に罪の意識などあるはずがない」

といったひとがある。ひとをあざむいたり、おとしめたり、害を加えたりする罪悪とはまたちがった意味の罪のあることを、私は漠然と感じていた。小学生のころ、本堂で説教があると、太い柱のかけから説教師の横顔をながめていた。説話の面白さにつられていたのはたしかだが、話の面白さ以外に何か心の中にすこしずつ蓄積されていったようである。それが何か、あらためて考えたこともなかった。が、罪の意識というものは人間であるかぎりだれもが持っているものだとはわかった。抹香くさい世界に生まれた私が、幼い内に罪の意識を、きわめて幼稚ながらもいだいたとしても、それは環境のせいだった。

小説を書きはじめてから約四十年になるが、一貫して私の小説の原動力となっているものは、人間の罪の意識である。私はまちがっても耽美主義の作家にもなれなければ、芸術至上主義の作家にもなれないのだ。最近はその感じがことにつよい。

八歳にして得度をうけ、崇願寺そうげんじの十八世の法灯を継ぐはずの僧籍にはいった。白衣白足袋で、長い墨染めの法衣に肩あげや、腰あげをしてもらい、長い袂を半分に縮めてもらって、檀家の月まいりに通った。私の三部経には仮名がついていた。仮名をよみまちがえるまいと緊張した。文類偈ぶんいげや和讃わさんをよみあげ、最後に御書なるものを読んだ。明治、大正、昭和にかけて、私の末寺の

属する高田派専修寺御書には

「抑、祖師聖人法義の趣は、世間には本法をうやまひ、公方をあがめ、国主地頭の法度をまもり、公役所当をつぶさに沙汰をいたし、主君に忠節をなし、父母に孝行をつくすべし……」

前大僧正堯秀の作であるが、小学生の私はこれをくりかえし読んだ。現在でもこの文句を暗記しているくらいである。時代錯誤な文書に、疑問を感じるようになったのは中学生のころであった。現在ではこの御書は消えている。

「仏は九全、王は十全」

という区別にも、疑いを持つようになった。

＊

仏が九全で王が十全というが、なぜ仏が十全だけ不足するのかと、少年らしい私の疑いだった。王法為本という政治的な配慮からであつたろう。しかし少年期の私の頭の中には、仏は絶対のものであるという観念があつた。何のために絶対かということはよくわからず、何となくそう思いこんでいた。

私は明治三十七年、三重県四日市市北浜田町の崇顕寺の長男として生まれた。崇顕寺は高田派専修寺の末寺である。当時の四日市市は人口四万足らずの市であつた。新道に立派な病院が出来

た。十全病院と大きな看板があがった。仏より一全多い十全病院である。名をつけたひとは多少仏教的な知識があつたのだらう。

母はこうといい、家つきの娘であつた。母にはひとりの弟があつた。崇願寺は当然その弟が法灯を継ぐはずであつたが、寺を継ぐことを忌避した。私にとってはただひとりの叔父である。この叔父のことは、私はまだ一度も小説に書いていない。「菩提樹」「青麦」「無慚無愧」「太陽蝶」にも、この叔父は登場していない。いずれは対決しなければならぬと思つてゐるが、もうひとり仙巖と僧名をもつた祖父と血縁関係にあつたひとがいる。仙巖は跛で、一生独身をとおした。四国巡礼の旅に出て、ろくろ谷というところで行路病者として死んだ。このひとの思い出は鮮明である。幼い私のよいあそび相手であつた。蛇を手づかみにしたり、首にまいてみせたりしたが、蛙をこわがった。小さい雨蛙にも怯えたものである。このひとのことも是非書きたいと思つてゐる。仙巖は崇願寺の庫裡に演じられたなまぐさい人間模様をじつとながめていた。かれには発言権がなかった。当然崇願寺で息をひきとる運命にあつたのだが、四国巡礼の旅に出ないではいられなかったのは、よくよくの思いからであつたらう。いまの私には、かれの気持ちに胸が痛くなるほどわかるのだ。

四日市市史をひもとくと、崇願寺は真宗高田派で、文龜二年創立、創立者不明となつてゐる。おなじ真宗高田派に東漸寺というのが近くにあるが、建仁元年、観月律師によつて創立されたとするされている。建仁元年は七百七十年昔である。後鳥羽上皇の院政時代であり、上皇が藤原定

家らに新古今和歌集の撰進を命じた年であった。親鸞が二十九歳のときであり、叡山の修行に絶望を感じ、悩みぬいたあげく山をおりて、京都の六角堂に参籠をはじめた年であった。法然は六十九歳で、吉水の禅室でさかんに新興宗教の浄土宗をひろめていた。親鸞を開祖とする浄土真宗は、海のものとも山のものともわからない時代であった。東漸寺がそのころから浄土真宗であつたはずはなく、おそらく天台系の寺院ではなかつたかと想像される。崇顕寺は文亀二年時代からようやく浄土真宗になったものか。もっとも明治以前までは浄土真宗と名のすることは許されず、一向宗と呼ばれていた。

*

高田派専修寺の真慧と時をおなじくして本願寺に蓮如がいた。ふたりは教勢の上で争つた。もし蓮如があらわれなかつたならば、浄土真宗の各派は、真慧によつて統合されたかも知れなかつた。それほどの傑物であり、高田派にとっては中興の祖といわれている。各末寺の本堂には、右に親鸞像を、左に真慧の画像をかかげることになっていた。

高田派は親鸞の血脈をひいていない。下野高田に親鸞の高弟の真仏がいた。各教団の中ではないちばん大きかった。法灯は代々高弟から高弟に継がれた。それがいつからか世襲になった。その何代目かの法主によつて、私は得度をうけた。

八歳のときであった。頭をつるつるに剃って、青い法衣を着せられた。専修寺高田本山の本堂の余間で、八つの私は法主の前に平蜘蛛のようにはいつくばった。そばの僧に教えられて、法主が唱える経文を復唱した。背の高い、髭をはやした、こわいひとという印象がある。現在の法主の父君にあたる常盤井堯猷師である。学者としても名を知られた法主であった。一人前の僧となつた私は、後刻内陣にすわっていた。私は真慧の画像のある側のまん中ごろの経机に向かつていた。うしろのひろい余間にはぎつしりと経机が並んでいたが、中央のところに六十年配の僧がぽつんとひとりすわっていた。私といっしょにその日得度をうけたひとである。僧位と寺格によつて、孫のような私が内陣にすわり、一方ははるか末座にすわるのだった。私はろくにお経がよめないのだが、老人はすでに立派な僧の資格をもっているのだ。宗門の階級制度のせいであつた。私は何となく奇異な感じをうけた。法主をはじめ四、五名のえらい人たちは内陣にすわっているが、私たち二人以外にたれもいなかった。おびただしい数のからの経机の列がいまもなお私の目にあざやかに残っている。

浄土真宗の末寺に生まれたことは、私の仕合わせであつた。他の宗派では妻帯は禁じられていた。八百年昔そのため親鸞がどのような圧迫をこうむつたことか。一生不犯ふはんが僧の建て前であつたのに、親鸞は非僧非俗を標榜ひようぼうして、敢然と妻子を擁した。そのおかげで私はぬくぬくと寺の長男として檀家から歓迎されて生まれて来た。もしも他の宗派であつたならば、かくし女のはらから生まれた子として、日陰者の生活を余儀なくされたであらう。浄土宗の庫裡に大黒たいこくと呼ばれる

女性がいる。梵妻である。浄土宗は肉食妻帯を許さない宗派であった。そのため徳川中期には、浄土宗の鎮西派は口をきわめて親鸞の肉食妻帯を責めた。が、今日では一生不犯を表看板にしている臨済宗ですら、妻帯を許している。子供が多い家庭は口べらしのため、子供を寺に送りこんだ。どこの寺でも法灯の継承者に不足をしなかったが、今日では子供は金のため、子供を寺に送りこんで、法灯の継承者に困るようになり、何百年来の一枚看板をおろさねばならなくなった。宗教は時代により変化するようである。八百年昔に人間性に立脚した親鸞の教えのおかげで、今日の私がありうるのだった。

しかし、そのため私は「無慚無愧」を書かねばならなくなった。が、恨みに思っているのではない。幼いころから親鸞に何となく親しみをいだくことが出来たのは、仕合わせであった。これが道元、栄西、明恵、日蓮、法然、一遍であったならば、どうなっていただろうか。今日の私でない私になっていたであろう。

一人前の僧になったのだから、私は三部経を楽によめるようにならねばならなかった。私は父がひるねしている枕許で、お経の素読をならった。学校でおぼえない漢字が多かった。知っている字もそのままでは通用をしない、いわゆるお経読みである。眠っていると思っていると、父は私の誤読を指摘した。父は三部経を暗記していた。この稽古がつらかった。他日生家の崇顕寺をとりだすようになった原因のひとつは、そこにあった。

*

わけのわからない経文を習って、それが本人の魂にどのような役にたつのか、ということにくに疑問をいだく年齢でもなかった。いずれにしても一人前のお坊さんになるには、なみ大ていでない勉強が必要だということがわかった。

小学生の私にとって、夏休みはたのしみであった。今日の小学生とちがつて、のんきな学校であったが、それでも夏休みは解放感にあふれた日々であった。友だちは鵜の森と呼ばれていた鎮守の森へ蟬取りに出かけていく。小川で魚をとったり、釣りをしたり、泳いだりしていた。友だちが誘いに来る。しかし私は昼寝の父の枕許でむずかしい経文を習わねばならなかった。最初の二、三回は父といっしょによむのだが、それからあとは私がひとりでよまねばならなかった。風通しのよい上廊下の板の間にうすべりを敷いて、父は昼寝をしていた。私はたどたどしい発音をくりかえした。よみそこねると、訂正された。何回もおなじところでつかえると、教える父の口調が次第に感情的になった。少年の私はおびえた。すらすらとはよめない。おびえながら、つかえながら、目に涙をうかべて口を動かした。経文には深遠な、浄土真宗の極意ともいわれる精髓がのべられているのだから、一字一句もまちがつておぼえてはならないと思いこんでいた。浄土真宗は大無量寿経と観無量寿経と阿弥陀経の三部が聖典とされている。老^{ぼろだい}大な一切経の中から、

この三点が選択されたものであった。私が父の昼寝で教えられたのは、もっぱら阿弥陀経であった。二十九歳のとき生家の崇顕寺をとりだすまで、ついに私は三部経の内容がわからずじまいであった。

私はいまでも、父の教育の方法がまちがっていたと思っている。少年の私に刻苦をあたえるだけで、すこしも精神のたすけにはならなかった。論語よみの論語知らずは、しまいには阿弥陀経のはじめの三ページぐらいは暗記するほどになった。それがいったい何の得になったのか。

私は若いころ友だちと酒をのむ席で、無芸であることでたびたび困った。友だちはいろんな唄を知っていた。友だちは私にかくし芸を強いた。

「何も知らない、ぼくは歌えない。仕方がないからお経を唱えるよ」

友だちはかえってそれを面白がった。私は阿弥陀経を三ページほど立て板に水のごとき調子で唱えた。面白いはずはない。唱え終わると、酒席はしらけた気分になった。

二十九歳の春、家出した私は、これからは経文からいっさい解放されるのだと思うと、それだけでもうれしかった。生涯浄土三部経は自分に縁がないと思った。が、後日三部経には、いったい何が書かれているのかを知る必要が生じ、岩波文庫の浄土三部経をひもとくことになった。私は意外に思った。私があれば一字一句を神聖化し、ありがたいことばの羅列とばかり思っていた阿弥陀経は、たとえば私のかくし芸となったはじめから三ページには、「あるとき仏が舎衛国（シャエー）の祇樹給孤独園（ギジュキョク）というところにいて、大比丘衆が千二百五十人もいっしょであった」ということ